

中学生による森林づくり ～「ふるさと教育の森」事業～

山形県村山市教育委員会 ○工藤幸吉
川越一廣

1 はじめに

村山市「ふるさと教育の森」事業が昭和57年にスタートしてから、今年で21年目になります。生徒自らが木を植え、育てるという体験学習を通じて、自然や森林の大切さを学び、ふるさとに対する愛着心をはぐくもうと、毎年、市内中学生全員が体験してきました。

「ふるさと教育の森」のこれまでの足あとと現在の取り組みを紹介します。

2 これまでの事業の概要

(1) これまでの足あと

植林場所は、市の中心から西へ約20キロメートルも離れた葉山の麓で、伐採して間もない国有林を市が借り受けています。これまで、13ヘクタールの植林を終えて、現在の植林地は、6カ所目になります。スギの本数にして延べ4万本、生徒延べ人数で2万5千人にのぼります。

(2) 活動の様子

平成12年度までの19年間、毎年、市内6つの中学校が3日間に分かれて、1・2年生の男子が下刈りをし、1・2年生の女子が肥料をやり、3年生が植林をするという作業内容で行って来ました。生徒は、自転車で現地に向かったり、バスで途中まで行き、そこから30分位歩いたりして作業体験をしました。

事業開始当初から、国の森林管理署、山形県の北村山森林整備課のみなさんから絶大なるご支援をいただき、各作業における生徒への指導も中心的に行ってもらっています。

3 実施プログラム（新世紀に入って）

20年目の昨年度から、6カ所目の植林地に場所を移し、もっと森林に親しんでもらうために、山に滞在する時間を長くとり、内容も新たなメニューを加えました。

(1) 指導体制

- | | |
|------------|--|
| ○森林教室 | 森林管理署、北村山森林整備課、市農林課、
北村山森林組合、林業士、市教育委員会 |
| ○ふれあい森林ゲーム | 北村山森林整備課、市農林課、市教育委員会 |
| ○植林 | 森林管理署、林業士、北村山森林組合、市教育委員会 |
| ○スギ伐倒実演 | 森林管理署、北村山森林組合 |
| ○山野草を知る | 森林管理署、林業士、北村山森林組合 |

(2) 実施日

中学校の統合を見据え、その中学校の生徒同士が交流できるよう、実施日や組み合わせに配慮する。

	学校	1年生		2年生		3年生		計		備 考
		クラス	人数	クラス	人数	クラス	人数	クラス	人数	
6 \ 19 (水)	楯中			4	162	4	127	8	289	大型5台 福祉(小)バス1台
	計			4	162	4	127	8	289	
6 \ 20 (木)	楯中	4	127					4	127	大型2台 小型1台 大型2台 福祉バス1台 大型1台
	西中	2	44	2	49	2	56	6	149	
袖中	1	20	1	13	1	20	3	53		
計	7	191	3	62	3	76	15	329		
6 \ 24 (月)	葉中	2	49	2	54	2	60	6	163	大型3台 小型1台 大型3台 大型2台
	戸中	1	32	2	54	2	48	5	134	
大中	1	27	1	28	1	36	3	91		
計	4	108	5	136	5	144	14	388		
合 計		11	299	13	360	12	347	36	1,006	

※大型バス 55人乗り、小型バス 21人乗り、福祉バス 45人乗り

(3) 事業の詳細

① 森林教室 対象： 全員 11:40～12:20

ア、目的 森林の役割や林業について、林業士等の話しを通し、森林に対してより理解を深めること。

イ、内容 森と木、山の歴史、山の育て方などはなし

ウ、講師 (財)山形県みどり推進機構 山田寛爾 氏

② ふれあい森林ゲーム 対象： 3年生 13:00～14:00

ア、目的 ゲームの中で、生活の知恵を学ぶとともに、楽しみながら森林に親しみかつ生徒同士の交流を図る。

イ、班編成 中学校毎に、5人のグループに分ける。

ウ、内容 (各ポイントを設定する)

- ・木の高さを測る。(1メートルのテープを使って、木の高さを測る)
- ・樹齢を推測する。(樹体や樹勢をみて樹齢を推測する)
- ・距離を測る。(1メートルのテープ・歩幅などを使って、距離を測る)
- ・面積を測る。(1メートルのテープ及び計算機を使って、面積を測る)
- ・方位を求める。(道具を使わず年輪や太陽の位置から北の方位を求める)

エ、指導 各ポイントにインストラクターと教員がつき、指導、助言を行う。

③ 植林 13:00～14:00 対象：1、2年生

ア、班編成 1年、2年男女混合で、2人又は3人1組で行う。

	面積	グループの数	計
1日目	20a	楯中	60組
2日目	30a	楯中(45組) 西中(35組) 袖中(15組)	95組
3日目	30a	葉中(35組) 戸中(30組) 大中(20組)	85組
計	80a		240組

イ、植林場所の区割り 実施日毎の設定はするが、学校毎の区割りはしない。

ウ、作業方法 2人又は3人1組(唐鋏、スギ苗木)で、1組当たりスギ苗木8本を植栽する。

④ スギ伐倒実演 14:15～14:30 対象：全員

- ・木を倒した後、木の高さを実測する。(1年生の代表)
- ・切り株などの年輪から、樹齢を数える。(各中学校から2年生代表3名)

⑤ 山野草を知る 14:30～15:00 対象：全員

- ・林業士等から、山野草を教えてもらおう。(山菜などをいっぱい採ろう)

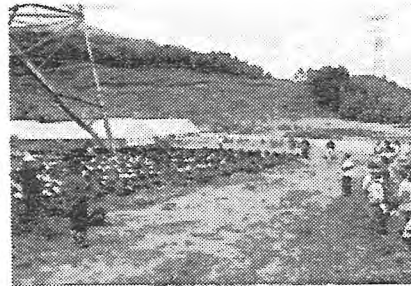
⑥ 森林ゲームの解答と表彰 15:10～15:20 対象：全員

- ・ゲームごとに、最優秀グループに賞品を贈る。

4 生徒の活動の様子

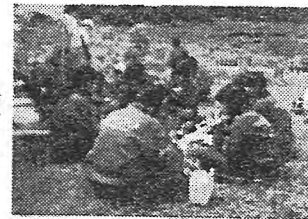
(1) オリエンテーション

現地では、初めに簡単なオリエンテーションを行います。今年度は、昭和57年の本事業開始に多大なお力添えを頂いた、当時の村山営林署長 伊藤彦太さんから、生徒たちにそのころのお話をしていただきました。



(2) ふれあい森林教室

約40分、樹木医の先生から、森林や樹木・山野草を使った生きた学習を行っていただきます。一方的な話ではなく、生徒と交流を交えての学習なので、植物の持つ智慧や命の輝きを実感できると感じます。

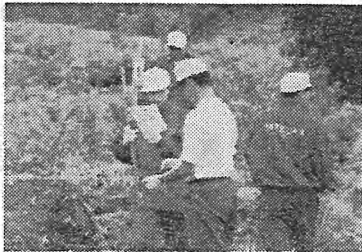


(3) 昼食タイム

頭を使ったその後は、弁当を開いての昼食タイム。青空の下、山の景色と美味しい空気をおかずにして友達といっしょに楽しいひとときを過ごします。

(4) 植林

昼食が終わると、1・2年生は植林です。2～3人グループになって、1人は唐鋤を持ち、後の人はスギ苗木を持って植林場所に向かいます。森林管理署の方々から植え付けの指導を受けながら、たっぷりと1時間汗を流します。



(5) ふれあい森林ゲーム

1・2年生の植林と平行して、3年生は、別会場で「ふれあい森林ゲーム」です。スギの大木の高さや樹齢を推測したり、森林の面積、距離、方位を求める問題に挑みます。生徒たちは、5人のグループで10ヘクタールもある広大なフィールドを縦横無尽に動き回ります。

(6) スギ伐倒実演

参加者全員でスギの大木の伐採実演を見学します。殆どの生徒が初めて見るとあって、木が倒れたときの驚きの大きな歓声と拍手が、あたり一帯に響き渡ります。「ふれあい森林ゲーム」で木の高さや樹齢を推測した杉を伐採してもらうので、実際に巻き尺で長さをはかり、年輪も数えます。



(7) 山野草を知ろう

最後に、教師、生徒と我々スタッフ全員がいっしょになって、ワラビなどの山菜を採ったり、林業士の案内で山野草の知識を深めたりしています。

こうして、緑豊かな自然の中に遊び心を取り入れた体験を通して、森林の大切さや自然の営みなどについて生徒自ら考えることなど、体で学ぶ生きた教育をねらいとしています。



5 参加生徒の声・先生の声

(1) 男子生徒の感想

「最初はめんどろだなあと感じていました。でも、植林作業をしているうちに、だんだん楽しくなりました。山で遊んでいたら、体育着のにおいが草のにおいになっていました。山は、気持ちをリラックスさせると言っていました。そのとおりだと思いました。」

(2) 女子生徒の感想

「杉の苗木を植えるとき、地面を掘るたびに、根がたくさんありました。掘っても掘っても根ばかりでした。自然の力は、本当にすばらしいと思いました。周りの木々の色は、なんだか不思議で、同じ緑に見えたはずなのに違う色に見え、何にも例えようのないくらいきれいでした。山菜採りのときも、大きい植物が、地面を見えないくらいに隠しているのを見たときは、自然の力は強いものだなあと感じました。聞いたり、写真で見たりしただけでは分からないものが実感できて、すごいと思

ました。」

(3) 引率教師の感想

「知識と体験がかみ合って、五感で学べるいい機会。教師の力だけでは限界がある。地域のプロと一緒に子どもを育てるいい機会と思う。」

6 むすび

「ふるさと教育の森」事業を通して、生徒たちは、自然の豊かさや偉大さ、森林の大切さを実感を伴って学ぶことができます。

生徒たちが植林した杉の苗木も、何十年か後には立派な杉の大木になることでしょう。私たちは、この杉のように、子供たちも大地にしっかり根を張り、天に向かってまっすぐに伸びて行ってほしいと願っています。



このような活動を21年間継続してきたということは、村山市出身の中学1年生から35才まで全員が、植林などの体験を通して森林と触れ合っているということになります。学校教育における森林理解・環境教育の大切な視点の一つは、生徒一人一人の心の中に原風景・原体験を刻むことであると考えます。これからの人生で、自己の生き方・ものの考え方の基盤になるからです。

また、今年度から新教育課程・学校週5日制が完全実施されました。一番のねらいは、「ゆとり」の中で「生きる力」を育てることにあります。本事業を通して、学校での学習と現地での体験がしっかり結びつき、間接的な知識ではなく、その道のプロから経験に裏打ちされた真実を学ぶことが、非常に有効であると考えます。

森林理解・環境保護に関して、学校教育が果たす役割は、今後ますます重要になってくると思われます。時代と生徒のニーズにあったプログラムの開発を今後も続け、より有効な事業にしていきたいと考えています。